



ホセアは自分を裏切り、背信した妻を赦せない思いでしょう。けれども、イスラエルの民の原点に帰り、「淫行」の妻ゴメルの哀れで、孤独で、知恵のない姿に、貧しい奴隷であり、帰るべき家のないさすらいの民であった自分たちの姿を重ね、神の招きがあったこと忘れることはありませんでした。

それゆえ、わたしは彼女をいざなって／荒れ野に導き、その心に語りかけよう。／ そのところで、わたしはぶどう園を与え／アコル(苦惱)の谷を希望の門として与える。そこで、彼女はわたしにこたえる。おとめであったとき／エジプトの地から上ってきた日の

ホセア Laura Kranz ように。(ホセア 2:14)

十戒の第七戒が「姦淫してはならない」です。民は、自らの神以外の神々への信仰を持つこと、他民族と婚姻関係を持つことを背信とみなし、これをも「姦淫」という言葉で示しました。

その土地の住民と契約を結ばないようにしなさい。彼らがその神々を求めて姦淫を行い、その神々にいけにえをささげるとき、あなたを招き、あなたはそのいけにえを食べるようになる。(出34:15)

聖書は背信する人を女で表現し、女全体へのイメージ操作をしてきた歴史があります。

背信の女イスラエルが姦淫したのを見て、わたしは彼女を離別し、離縁状を渡した。しかし、裏切りの女であるその姉妹ユダは恐れるどころか、その淫行を続けた。(エレ3:8)

ホセア書も、神とイスラエルの民の関係を、ホセアとゴメルの関係に対比させた図式で捕らえていて、聖書の男尊女卑の見方に立っているため、私には抵抗があり、読み難い面があります。男と女は同等の存在であるからこそ、その価値を認め、享受し、助け、学びます。上下の差ではなく、異性であるから、憧れ、補い、支え、学びます。

ホセアはゴメルの問題を離れ、民の問題を語るにつれて、落ち着いた口調に変わり、告発しながらも、弱さ、躓きを受容するかのようになり、憐みの思いを滲ませています。そして、とうとう、預言者が愚か者とされ、霊の人は狂う。(9:7)と、神までもが、民の度重なる罪、背信の姿に狂おしいほどの思いを抱いていると述べているのです。それにも関わらず、常に共にいて下さる神を覚え、そして、再び「出エジプト」への感謝の思いに至ります。

まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。／ わたしが彼らを出したのに／彼らはわたしから去って行き／バアルに犠牲をささげ／偶像に香をたいた。／ エフライムの腕を支えて／歩くことを教えたのは、わたしだ。しかし、わたしは彼らをいやしたことを／彼らは知らなかった。／ わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き／彼らの顎から軛を取り去り／身をかがめて食べさせた。

ここでは神と民との関係が夫婦ではなく、親が子を愛する関係へと転換してきています。神の無償の愛により再び生かされることをホセアは知ります。イエス様は「アッバ、父よ」と呼び、神と人との関係を親子関係で示されました。もともと、神と人は対等、平等の関係ではなく、創造者、被造物の関係です。ここに至り、私はとても、ほっとします。同時に、神の愛に感謝し、従うホセアは、ゴメルを棄てることは、神が民に関わらないに等しいことになると思い至ります。ゴメルを買い戻し、家に迎え入れ、子ども達と新たに愛の家を再建するのです。

親を失った者は／あなたにこそ憐れみを見いだします。／ わたしは背く彼らをいやし／喜んで彼らを愛する。まことに、わたしの怒りは彼らを離れ去った。(14:4)